

「ひとめぼれ」の栽培法(第63号追補)
 — 「ひとめぼれ」の生育量の目安 —

農業センター・古川農業試験場

1 取り上げた理由

水稲品種「ひとめぼれ」の10a当たり目標収量を600kgとした場合の収量構成要素の目安を先に普及に移す技術(第63号)の中で示しているが、このときは、粒厚1.7mm以上の収量を想定していた。しかし、近年、高品質化を目指し、粒厚1.9mmの篩目で調製されることが多くなり、粒厚1.9mm以上に対応した収量構成要素や生育量の目安が要望されるようになった。そこで、その後得られたデータを加え、粒厚1.9mm以上で検討したところ、その生育量及び窒素栄養条件の目安が得られたので、普及に移す技術第63号の追補とする。

2 普及技術

1) 粒厚1.9mm以上を想定した場合の安定した高収レベルは10a当たり550kg程度で、これを目標収量とする。このときの㎡当たり籾数は28,000~30,000粒である。

2) 前記籾数を目標とした場合、次の幼穂形成期(追肥前)生育量を目安とする。

窒素 吸収量 (g/㎡)	稲体 乾物重 (g/㎡)	草丈 (cm)	茎数 (本/㎡)	葉色 (SPAD)
5.3~5.8	330~380	63~68	650~700	35~37

3) 穂揃期生育量は乾物重で730~780g/㎡、窒素吸収量で7.3~7.8g/㎡を目標とする。なお、穂揃期の窒素吸収量が多くなると玄米窒素濃度が高まる傾向が見られるので、この範囲を超えないことが望ましい。

4) 1) の条件を満たす収量構成要素の目安は次のとおりである。

	㎡当たり 籾数 (千粒/㎡)	一穂 籾数 (粒/本)	穂数 (本/㎡)	千粒重 (g)	登熟歩合 (%)	窒素 吸収量 (g/㎡)	収量 (kg/a)
粒厚1.9mm以上	28~30	57~62	480~500	22.3	85~90	9.5~10.0	550
参考 [粒厚1.7mm以上 普及技術第63号]	30~32	57~62	500~530	22.0	86~91	—	600

3 利活用の留意点

- 1) 追肥法は、普及に移す技術第63号(幼穂形成期と減数分裂期に窒素成分でそれぞれ1kg/10a)に準ずる。
- 2) 普及に移す技術第63号「水稲ひとめぼれの葉色による栄養診断」、普及に移す技術第69号の参考資料「ひとめぼれの倒伏診断」を併せて参照する。
- 3) 窒素吸収量及び乾物重の推移については、稲作情報等を参照する。
- 4) 復元田等、穂首分化期以降の地力窒素の発現量が多い場合には適用できない。

(問い合わせ先：農業センター農産部 電話 022-383-8246)

4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名及び研究期間

需要創造型みやぎ米の評価向上対策事業「高品質・良食味みやぎ米の均質生産技術の確立」(H2～3)
 うまい米・宮城米の品質収量水準向上と安定化試験(H3)
 商品性の高い宮城米の高水準安定生産技術の確立(H4～9)
 新品種栽培法の早期確立(古川農業試験場、H8～10)
 優れた品種特性を生かした水稻栽培技術の確立(H10～11)

2) 参考データ

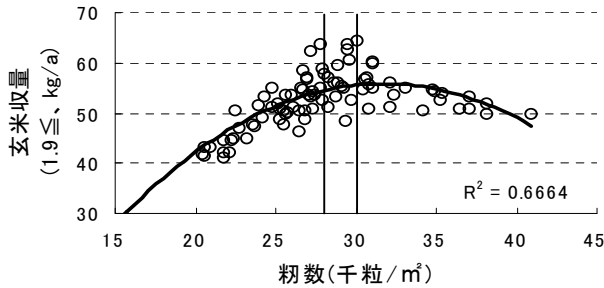


図 1 粒数と玄米収量

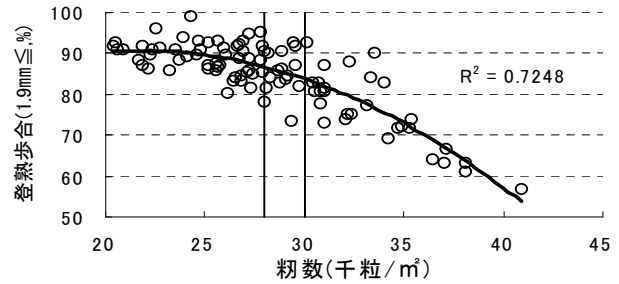


図 2 粒数と登熟歩合

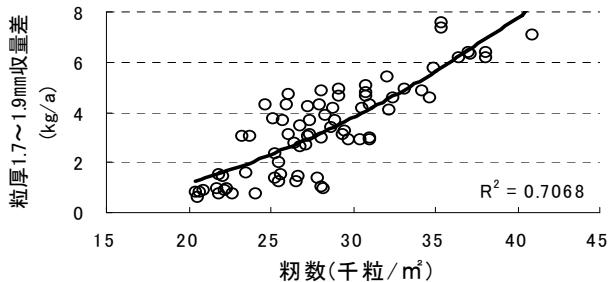


図 3 粒数と粒厚1.7～1.9mm収量差

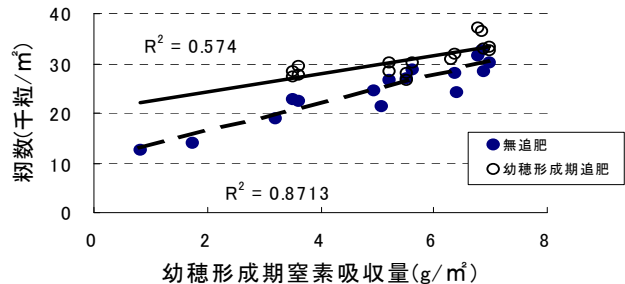


図 4 幼穂形成期窒素吸収量と粒数

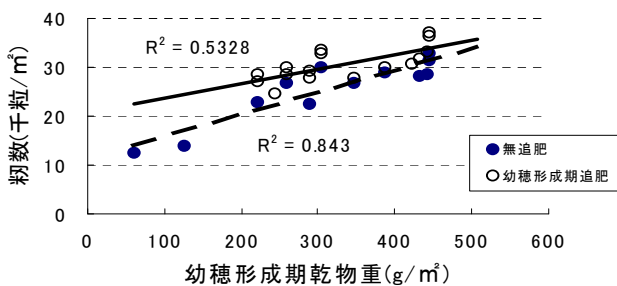


図 5 幼穂形成期乾物重と粒数

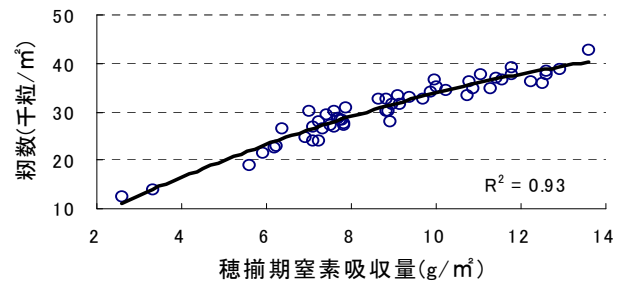


図 6 穂揃期窒素吸収量と粒数

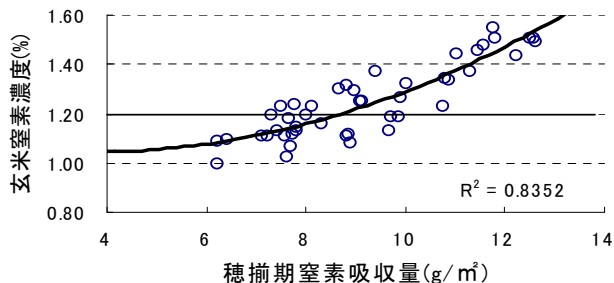


図8 穂揃期窒素吸収量と玄米窒素濃度

注) 良好な食味のためには玄米窒素濃度 1.2%以下が望ましい。

3) 発表論文等 未定